

二〇二一年度入学試験 B-I

京都学園中学校

国語

注意

- 問題は全部で十三ページあります。
- 「試験開始」の合図があるまで問題を開いてはいけません。
- 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
- 質問がある場合は、静かに手をあげ、教員が来るのを待ってください。
- 「試験終了」の合図があったらすみやかに解答をやめ、以後は教員の指示にしたがってください。

一 次の①～④の漢字を正しい筆順で書くとき、()内の数字にあたる画をなぞりなさい。

- ① 右 (2)
- ② 必 (3)
- ③ 齒 (11)
- ④ 飛 (5)

三 次の①～④の略語を正式な言い方に直しなさい。

- ① パソコン
- ② プレゼン
- ③ 高校
- ④ 図工

③ 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

「ナンバー1にならなくてもいい。もともと特別なオンリー1」

この「カシ」に対しては、大きく二つの意見があります。

一つは、このカシの言うとおり、**A**であることが大切という意見です。

何も**B**にだけ価値があるわけではありません。私たち一人ひとりが特別な個性ある存在なのだから、それで良いのではないか。これはもつともな意見です。

一方、別の意見もあります。

そうは言っても、世の中は競争社会です。**C**で良いと満足してしまつては、努力する意味がなくなつてしまいます。世の中が競争社会だとすれば、やはり**D**を目指さなければ意味がないのではないか。これも、納得できる意見です。

オンリー1で良いのか、それともナンバー1を目指すべきなのか。あなたは、どちらの考えに賛成するでしょうか？

① じつは、生物たちの世界は、この問いかけに対して、² メイカクな答えを持っているのです。
「ナンバー1しか生きられない」

じつは、生物の世界では、これが鉄則です。

理科の教科書には、ナンバー1しか生きられないという法則を証明する「ガウゼの実験」と呼ばれる実験が紹介されています。

旧ソビエトの生態学者ゲオルギー・ガウゼは、ゾウリムシとヒメゾウリムシという二種類のゾウリムシを一つの水槽でいっしょに飼う実験を行いました。

すると、どうでしょう。

最初のうちは、ゾウリムシもヒメゾウリムシも共存しながら増えていきますが、やがてゾウリム

シは減少し始め、ついにはいなくなってしまう。そして、最後には、ヒメゾウリムシだけが生き残ったのです。

二種類のゾウリムシは、エサや生存場所を奪い合い、ついにはどちらかが滅ぶまで競い合います。そのため、一つの水槽に二種類のゾウリムシが共存することはできないのです。

「ナンバー1しか生きられない」

これが自然界のキビしい鉄則なのです。

競争は水槽の中だけではありません。

自然界は、弱肉強食、激しい競争や争いが日々繰り広げられている世界です。あらゆる生き物がナンバー1の座を巡って、競い合い、争い合っているのです。

しかし、^② 不思議なことがあります。

自然界には、たくさん生き物がいます。

もし、ナンバー1の生き物しか生き残れないとすれば、この世の中には、ナンバー1である種類の生き物しか生き残れないことになります。それなのに、どうして自然界には、たくさん種類の生き物がいるのでしょうか。

ゾウリムシだけを見ても、自然界にはたくさん種類のゾウリムシがいます。

もし、ガウゼの実験のようにナンバー1しか生きられないとすれば、水槽の中と同じように、自然界でも一種類のゾウリムシだけが生き残り、他のゾウリムシは滅んでしまうはず。しかし、自然界にはたくさん種類のゾウリムシがいます。

これは、どうしてなのでしょう？

じつは、ガウゼが行った実験には、続きがあります。そして、この実験が大きなヒントとなるのです。

続きの実験では、ガウゼはゾウリムシの一種類を変えて、ゾウリムシとミドリゾウリムシという二種類で実験をしてみました。

すると、どうでしょう。

驚くことに、どちらのゾウリムシも減ぶことなく、二種類のゾウリムシは、一つの水槽の中で共存をしたのです。

これは、どういうことなのでしょうか。

じつは、ゾウリムシとミドリゾウリムシとは、違う生き方をしていました。

ゾウリムシは、水槽の上の方にいて、浮いている大腸菌をエサにしています。これに対して、ミドリゾウリムシは水槽の底の方にいて、酵母菌をエサにしているのです。

そのため、^③ゾウリムシとヒメゾウリムシのときのよう争いは起きなかったのです。

「ナンバー1しか生きられない」

これは、間違いなく自然界の鉄則です。

しかし、ゾウリムシもミドリゾウリムシも、どちらもナンバー1の存在として生き残りました。つまり、ゾウリムシは水槽の上の方でナンバー1、ミドリゾウリムシは水槽の底の方のナンバー1だったのです。

このように、同じ水槽の中でも、ナンバー1を分け合うことができれば、競い合うこともなく共存することができます。生物学では、これを「棲み分け」と呼んでいます。

自然界には、たくさんの生き物が暮らしています。

つまり、すべての生き物は棲み分けをしながら、ナンバー1を分け合っています。

そのように、自然界に生きる生き物は、すべての生き物がナンバー1なのです。

自然界には、わかっているだけで一七五万種の生物が生存していると言われているのですから、少なくとも一七五万通りのナンバー1があるということになります。

ナンバー1になる方法はいくらかもあるということなのです。

ナンバー1しか生きられない。これが自然界の鉄則です。

自然界に暮らす生き物は、すべてがナンバー1です。どんなに弱そうに見える生き物も、どんな

につまらなく見える生き物も、必ずどこかでナンバー1なのです。

ナンバー1になる方法はいくらでもあります。

この環境^{かんきやう}であれば、ナンバー1、この空間であればナンバー1、このエサであればナンバー1、この条件であればナンバー1……。こうしてさまざまな生き物たちがナンバー1を分け合い、ナンバー1しか生きられないはずの自然界に、^④多種多様な生き物が暮らしているのです。

自然界は何と不思議なのでしょう。

そして、ナンバー1はたくさんいますが、それぞれの生物にとって、ナンバー1になるポジションは、その生物だけのものです。すべての生物は、ナンバー1になれる自分だけのオンリー1のポジションを持っているのです。そして、オンリー1のポジションを持っているということは、オンリー1の特徴^{とくちゆう}を持っているということになります。

つまり、すべての生物はナンバー1であり、そして、すべての生物はオンリー1なのです。

(稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる 生き物をめぐる個性の秘密』)

問一 〰〰〰部ー〰〰3のカタカナを漢字に直しなさい。

問二

| |
|---|
| A |
|---|

| |
|---|
| D |
|---|

には①「オンリー1」か、②「ナンバー1」のいずれかが入ります。それぞれ数字で答えなさい。

問三 ー部 ①「ナンバー1しか生きられない」とありますが、このことを言いかえた言葉を本文中から五字以内でぬき出しなさい。

問四 ー部 ②「不思議なこと」とありますが、それはどのようなことですか。簡潔に説明しなさい。

問五 — 部 ③ 「ゾウリムシとヒメゾウリムシのときのような争い」とありますが、それはどのような争いですか。二十五字以内で説明しなさい。

問六 — 部 ④ 「多種多様」とありますが、同じ意味の四字熟語を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 二束三文 イ 一長一短 ウ 千差万別 エ 八方美人

問七 筆者の考える自然界の法則としてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 全ての生物は、自分たちがオンリー1か、ナンバー1か自分たちでは区別ができないということ。
- イ 全ての生物が、エサや居場所を奪い合った結果、最終的に唯一の生物だけが生き残るということ。
- ウ 全ての生物が、互いに特徴を認め合い、同じ場所で、エサを分け合い共存を目指そうということ。
- エ 全ての生物は、ナンバー1になれる自分だけのオンリー1のポジションを持っているということ。

B 日程 [B I]

四 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

ひろしは、セーブもできないままゲームの電源をお父さんにいきなりぬかれたことを怒っている。今回ばかりは絶対にあやまらないと決めた。すでに丸一日あやまっていけない。そんな中、お父さんと二人で過ごす「お父さんウィーク」が始まる。

「お父さんウィーク」の初日、お父さんは、さっそく特製カレーライスをつくった。

「ほら食べる、お代わりたくさんあるぞ」とごきげんな顔で大盛りのカレーをぱくつく。

でも、お父さんは料理が下手だ。じゃがいもやにんじんの切り方はでたらめだし、しんが残っているし、何よりカレーのルウが、あまったるくてしかたない。

カレー皿に顔をつっこむようにしてスプーンを動かしていたら、お父さんが、「まだ怒ってるのか？」と笑いながら言った。

「ひろしもけっこう根気あるんだなあ」

根気とは、ちよつと違うと思う。どっちにしても、返事なんか、しないけど。

「この前、いきなりコードぬいちゃって、悪かったなあ」

あっさりあやまられた。最初の予定では、これでぼくもあやまれば仲直り完了かんりょう——のはずだったけど、ぼくはだまっただまだった。

「でもな、一日三十分の約束を守らなかつたのは、もっと悪いよな」

わかっている、それくらい。でも、わかっていることを言われるのがいちばんいやなんだってことを、お父さんはわかってない。

「で、どうだ。学校、最近おもしろいか？」

ああ、もう、そんなのどうだっていいじゃん。^①言葉がもやもやとしたけむりみたいになって、胸の中にたまる。

知らん顔してカレーを食べつづけたら、お父さんもさすがにあきらめたみたいで、そこからもう話しかけてこなかった。

「お父さんウィーク」の初日は、そんなふうには、おしゃべりすることなく終わった。

次の日の夕食も、カレー。ゆうべの残りを温め直して食べた。ふつうのカレーだと、一晩おくとコクが出ておいしくなるけど、特製カレーのあまったるさは変わらない。

「なあ、ひろし、いいかげんにきげん直せよ。しつこすぎないか？」

お父さんは、夕食の途中、ちょっとこわい顔になって言った。

ぼくもほんとうは、もう仲直りしちゃおうかな、と思っていたところだった。でも、Aを打たれたせいで、今さらあやまれなくなった。ここであやまると、いかにもお父さんにまた叱しかられそうになったから——みたいで、そんなのいやだ。

「もしもし、ひろしくーん、聞こえてますかあ」

お父さんはのひらをメガホンの形にして言ったけど、ぼくがだまったままなので、今度はまたおつかない顔にもどって、「いいかげんにしろ」とにらんできた。

ぼくは肩かたをすぼめて、カレーを食べる。② おいしいのに、ぱくぱく、ぱくぱく、休まずに食べつづける。

自分でも困ってる。なんでだろう、と思ってる。今までなら、あっさり「ごめんなさい」が言えたのに。もっとすなおに話せてたのに。特製カレーだって、三年生のころまでは、すぐくおいしかったのに。

二人でだまってお皿を片付けているとき、お父さんは、「頭が痛いなあ」とつぶやいて、大きなくしゃみをした。

「かぜ、ひいたんじゃないの——？」

薬を飲んで、早くねたほうがいいんじゃない——？

言いたかったけど、言えなかった。

B 日程 [B I]

翌朝、自分の部屋から起き出したぼくと入れかわるように、お父さんは「悪いけど、先行くからな」と、朝食も食べずに家を出ていった。「お父さんウィーク」では、よくあることだ。会社から早く帰ってくるぶん、朝は一番乗りして、ゆうべできなかった仕事片片付けるのだ。

お母さんはまだねている。これも、「お父さんウィーク」のいつものパターン。仕事がいそがしい一週間のうち、特にいそがしい何日かは、家に帰るのが真夜中の二時や三時になる。その代わり、次の日はふだんより少しだけゆっくり出勤すればいいのだという。

食卓しょくたくには、目玉焼きと野菜いためのお皿が出ていた。黄身がくずれているから、お父さんがつくってくれたのだろう。朝は時間がないんだから、おかずなんかつくらなくてもいいのに。目玉焼きぐらい、ぼくはもうつくれるのに。

でも、お父さんは、「火を使うのは危ないから」と、オーブントースターと電子レンジしか使わせてくれない。それがいつもくやくして、でも、お父さんがねむい目をこすりながら、ぼくのために目玉焼きをつくってくれたんだと思うとうれしくて、でもやっぱりくやくして、そうはいつでもうれしくて——「行ってらっしゃい」を言わなかったから、急に悲しくなってきた。

朝食を終えて自分の部屋にもどったら、ランドセルの下に手紙が置いてあった。

へお父さんとまだ口をきいてないの？ お父さん、さびしがっていましたよ

絵の「トクイトクイなお母さんは、しよんぼりするお父さんの似顔絵を手紙にそえていた。

学校にいる間、何度も心の中で練習した。

お父さん、この前はおめんさない——。

言える言える、だいじょうぶだいじょうぶ、と自分を元気づけた。

「うげえっ、そんなの言うのってかっこ悪いよ」と自分を冷やかす自分も、胸のおくのどこかにいるんだけど。

夕方、家に帰ると、お父さんがいた。

「かぜ、ひいちゃったよ。熱があるから会社を早退して、さっき帰ってきたんだ」

パジャマ姿で、² イマ²に出てきたお父さんは、ほんとうに具合が悪そうだった。声はしわがれて、せきも出ている。

「晩ごはん、今夜は弁当だな」

お父さんがそう言ったとき、思わず、ぼくは答えていた。

「何かつくるよ。ぼく、つくれるから」

「えっ？」

「だいじょうぶ、つくれるもん」

お父さんは、きよんとんとしていた。でも、³ いちばんおどろいているのは、ぼく自身だ。

「家をつくったごはんのほうが栄養あるから、かぜも治るから」

なんて、全然言うつもりじゃなかったのに。

「いや、でも……」と言いかけたお父さんは、少し考えてから、まあいいか、と笑った。

「お父さんも手伝うから。で、何をつくるんだ」

答えは、今度も、考えるより先に出た。

「カレー」

「だって、おまえ、カレーって、ゆうべもおとといも……」

「でもカレーなの、いいからカレーなの、ゼーったいにカレーなの」

子どもみたいに大きな声で言い張った。

④ ほっぺたが急に熱くなった。

「……じゃあ、カレーでいいか」

お父さんは笑って、台所の戸だなを開けた。

「おととい買ってきたルウが残ってるから、それ使えよ」

戸だなから取り出したのは——「甘口^{あまくち}」と書いてある箱。お子さま向けの、うんとあまいやつだ。

お母さんが「ひろしはこっちな」とぼくの分だけ別のなべでカレーをつくっていた低学年のころは、ルウはいつもこれだった。

「だめだよ、こんなのじゃ」

ぼくは戸だな別の場所から、お母さんが買い置きしているルウを出した。

「だって、ひろし、それ『中辛』だぞ。からいんだぞ、口の中ひいひいしちゃうぞ」

「なに言ってるの、お母さんと二人のときは、いつもこれだよ」

お父さんは、またきよとんとした顔になった。

「おまえ、もう『中辛』なのか？」

意外そうに、半信半疑できいてくる。

ああ、もう、これだよ、お父さんってなーんにもわかってないんだから。

あきれた。うんざりした。

でも、「そうかあ、ひろしも『中辛』なのかあ、そうかそうか」とうれしそうに何度もうなずくお父さんを見ていると、なんだかこっちまでうれしくなってきた。

二人でつくったカレーライスができあがった。野菜担当のお父さんが切ったじゃがいもやにんじりは、やっぱり不格好³だったけど、しんが残らないようにしっかり煮込^{にこ}んだ。台所にカレーのかがぶうんとただよ。カレーはこうでなくっちゃ。

お父さんは、ずっとごきげんだった。

「いやあ、まいったなあ。ひろしもう『中辛』だったんだなあ。そうだよなあ、来年から中学生なんだもんなあ」と一人でしゃべって、「かぜも治っちゃったよ」と笑って、思いつ切り大盛りにご飯をよそった。

食卓に向き合ってすわった。「ごめんなさい」は言えなかったけど、お父さんはごきげんだし、「今度は別の料理も二人でつくろうか」と約束したし、残り半分になった今月の「お父さんウィーク」は、いつもよりちよっと楽しく過ごせそうだ。

「じゃあ、いただきます」

口を大きく開けてカレーを頬張った。

ぼくたちの特製カレーは、^⑤ ほおば ぴりっとからくて、でも、ほんのりあまかった。

(重松清『カレーライス』)

問一 ㄣㄣㄣ部 ㄣㄣㄣのカタカナは漢字に直し、漢字はよみがなを答えなさい。

問二 ㄣ部 ①「言葉がもやもやとしたけむりみたいになって、胸の中にたまる」とありますが、その説明としてふさわしくないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もどかしい イ がてん 合点がいけない ウ 後ろめたい エ 歯がゆい

問三 Aに入るのにふさわしい語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 胸 イ 相づち ウ ひざ エ 先手

問四 ㄣ部 ②「おいしくないのに、ぱくぱく、ぱくぱく、休まずに食べつづける」とありますが、ひろしはなぜそのようなにしたのですか。簡潔に説明しなさい。

問五 — 部 ③ 「いちばんおどろいているのは、ぼく自身だ」とありますが、ひろしは何を「おどろいている」のですか。もっとも適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 夕食など作れる自信もないのに、自分が夕食を作ってしまったこと。
- イ けんかしている父の体調を案じ、自分が夕食を作ってしまったこと。
- ウ 父の提案に素直に従いたくなく、自分が夕食を作ってしまったこと。
- エ じつは弁当が食べたかったのに、自分が夕食を作ってしまったこと。

問六 — 部 ④ 「ほったが急に熱くなった」とありますが、その気持ちとしてふさわしくないものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 意地
- イ くやしき
- ウ はずかしさ
- エ 興奮

問七 — 部 ⑤ 「ぴりっとからくて、でも、ほんのりあまかった」とありますが、ここから読み取れるひろしの気持ちを二つ答えなさい。

〈問題はこれで終わりです〉

受験番号

学校名

小学校

氏名

① 右

② 必

③ 歯

④ 飛

①

②

③

④

問一

2

3

問二 A

B

C

D

問三

問四

問五

問六

四

問一 1

2

3

問二

問三

問四

問五

問六

問七

点線より下には何も記入しないこと。《成績集計欄》

B I

Blank box for score

Blank box for score

Blank box for score

Blank box for score

国語B-I

一 【計八点】

右 ② 必 ③ 齒 ④ 飛

三 【計十二点】

① パーソナルコンピュータ ② プレゼンテーション

② 高等学校 ④ 図画工作

三 【計四十二点】

問一 1 歌詞 2 明確 3 蔽 (2点×3)

問二 A ① B ② C ① D ② (3点×4)

問三 弱肉強食(競争社会) (4点)

問四 一種類しか生き残れないはずの自然界に、たくさんの種類の生き物がいること。 (6点)

問五 エサや生存場所をどちらかが減ぶまで奪い合うこと。 (6点)

問六 ウ (3点)

問七 エ (5点)

四 【計三十八点】

問一 1 得意 2 居間 3 ぶかつこう (2点×3)

問二 ウ (3点)

問三 エ (3点)

問四 父に返答することが嫌で、食べることに専念する形で、返事しないことをごまかすため。 (5点)

問五 イ (5点)

問六 イ (4点)

問七 父と仲直りが出来てほっとする気持ち。

自分が成長出来たことを父に認められたことに対して満足しながらも気恥ずかしい気持ち。 (6点×2)